

右俣之上



蓋河橋極能為遊遊屋事忘後私信  
年未新與負厚所開的作有作并  
涉落之今敢普法也其住漱於難者  
奉存公仍之進日見世開住者代而  
地性冷味住河禮為異和也後格別下也  
幸指在亦相替者今開的為作并  
格下也其和偏重預上右俣多也其後  
右之取涉熟之取方也其後多也其  
右遊來以秋重預在也

右坂市中西

右坂市藤橋之町目

子十一月

三井



右之書

八日寄書信

以日事官院後日七家... 右之書

右俣之上



蓋河橋極能為遊遊屋事忘後私信  
年未新與負厚所開的作有作并  
涉落之今敢普法也其住漱於難者  
離者住合其存後依之法代為地性  
吟味住河禮為異和也後格別下也  
幸指在亦相替者今開的為作并  
格下也其和偏重預上右俣多也其後  
右之取涉熟之取方也其後多也其  
右遊來以秋重預在也

子十一月

右坂市藤橋之町目

用取後

地而死

三井



右之書

大坂本店引札(天保11年)

天保八年二月の大塩の乱で全焼した三井大坂本店(呉服店)は、あしかけ四年後の同一一年一月八日によく本普請が竣工した。この時の開店広告として配られたのが口絵の引札である。引札に市中用と他所用の区別があったことが、保存された控の朱書(写真左方のやや薄い部分)によって知られる。両用ともほぼ同文であるが、市中用には「近日見世開」と「八日開店仕候」の文句が入っている。「開店諸用控」(本九九一)によれば印刷された引札の総枚数は七〇万六〇八〇枚で、うち二万一四〇〇枚余が市中へ配られている。配布は本店筋、両替店筋の暖簾内衆中に出入の菓屋、米屋の二名が加わり、総勢三〇余人が二人一組となつて一〇月二三日から二月二日までに行なつたという。そのさい羽織袴を着用し、「三郷町中并右町続之在料端々裏家迄不残」、そのほか「西国筋方之入船両川口迄茶船ニ乗不残」配っている。一方他所用引札は、開店の披露の意味で一二月八日の開店後に配られた。こちらは日雇、船、飛脚等を使い、諸国の得意先への挨拶状に五枚ずつ同封し、宣伝を依頼するという方法をとっている。しかしどの地域にどの位の数が及んだかは詳らかでない。

新築開店の宣伝、諸祝儀、謝礼等に要した総費用銀八三貫目余のうち、引札の経費は三〇貫目余で、約三六パーセントにあたる。この中で一九貫八五八匁五分を紙代が占めている。用紙は柳川杉原紙である。版摺には職人二人が五月九日からかかり、一人一日二千枚を摺りつけ、その摺り賃は墨代を含め一貫六一八匁一分とある。又、引札配りのさいの人件費として六貫三七二匁六分が計上されている。

開店初日の客は一五三〇人、その売上高は一四一貫六〇〇目に及ぶ。なお『三井文庫論叢』三号の口絵に当日の賑い振りを描いた絵馬が掲載されている。(樋口)